

主題:	ユネスコ水科学部長ソロシナジー氏の講演（要旨）
場所:	土木研究所 2 階 特別会議室
日時:	2004 年 5 月 18 日 (火) 10:00 ~ 11:00

□ 歴史的な水との関わり方を俯瞰

➤ 水は政治的に微妙なもの

例えば、アフリカの複数の国にまたがる流域は 263 を超え、18 か国、30 億人の人口が水資源を共有。

□ 主要会議のあらましと成果

➤ 認識の変化

1997 年が水に対する意識の転換期。国連総会では関連する 19 セッションが開かれ、過去 5 年間の進歩を確認。この結果、直ちに何らかの対策を実施しなければ、半世紀後にはほとんどの発展途上国が水危機に陥るとの調査結果から、89 の国連参加国を法規制する国連決議が初めてされた。

➤ ヨハネスブルク(2002 年)での交渉と成果

議論の末、国連事務総長から水、エネルギー、健康、生物多様性など 5 主要エリアを提案。水に対する認識が向上し、水は政治だけでなく環境上の議題となった。従来の水供給問題の繰り返しではなく、ひとつの章を監視機構に充ててその必要性を説いた点で、2002 年に行われた「持続可能な開発に関する世界サミット（南アフリカ・ヨハネスブルク）」は重要。

□ ユネスコの対応

➤ 膨大な予算

毎年新たに 330 ~ 350 億ドルが水資源の問題のために必要。

➤ 発展途上国の需要調査

アフリカだけで、技術者、研究所員、調査員など、水問題の専門家を 300 % 増員する必要がある。東南アジアでは 250 %、中南米 では 50 % の増員が必要。それが困難な課題であっても、発展途上国の支援は必要不可欠。

□ つくばに設置するユネスコセンターへの期待

➤ 目的と役割範囲

目的: 世界中の災害を扱い、災害対策の中心となる。引受能力の確立、教育、適用、世界的な災害削減。

役割範囲: 科学技術、データの連携、災害削減、災害予測、生産性に

対する悪影響の削減、対策と機構、社会の対応や活動内容を監視。工学と科学と社会科学を結合し、必要とする人々に新しい技術、教育、支援を供給する。

- 過去 10 年間の主要な災害  
ハリケーンによる被害が大きい。被害総額は 40 億ドルで、多数の人が家屋を失った。
- 経験豊かな国、日本  
日本は、災害時と被災後の生活について、100 年を超える特別な知識と経験を持つ唯一の国。
- つくばのユネスコセンターの特徴  
国際的な災害削減を目指すヨハネスブルクサミットを具現化したもの。京都会議の方針とも合致。

#### □ ユネスコの施設と今後

- 他のユネスコセンターについて  
過去 60 年間に多くのセンターが設立され、現在 9 つのセンターが機能している。人資源が大切。100 人が水に関わる仕事に従事。プログラムは変遷し、進化するもの。パナマ、クアラルンプル、カイロ、チリの例を紹介。
- 国連にとって重要な時代  
今後 20 年間は、国連にとって重要な時期となる。持続可能な開発についての教育、危険の削減、国際協力などが課題。